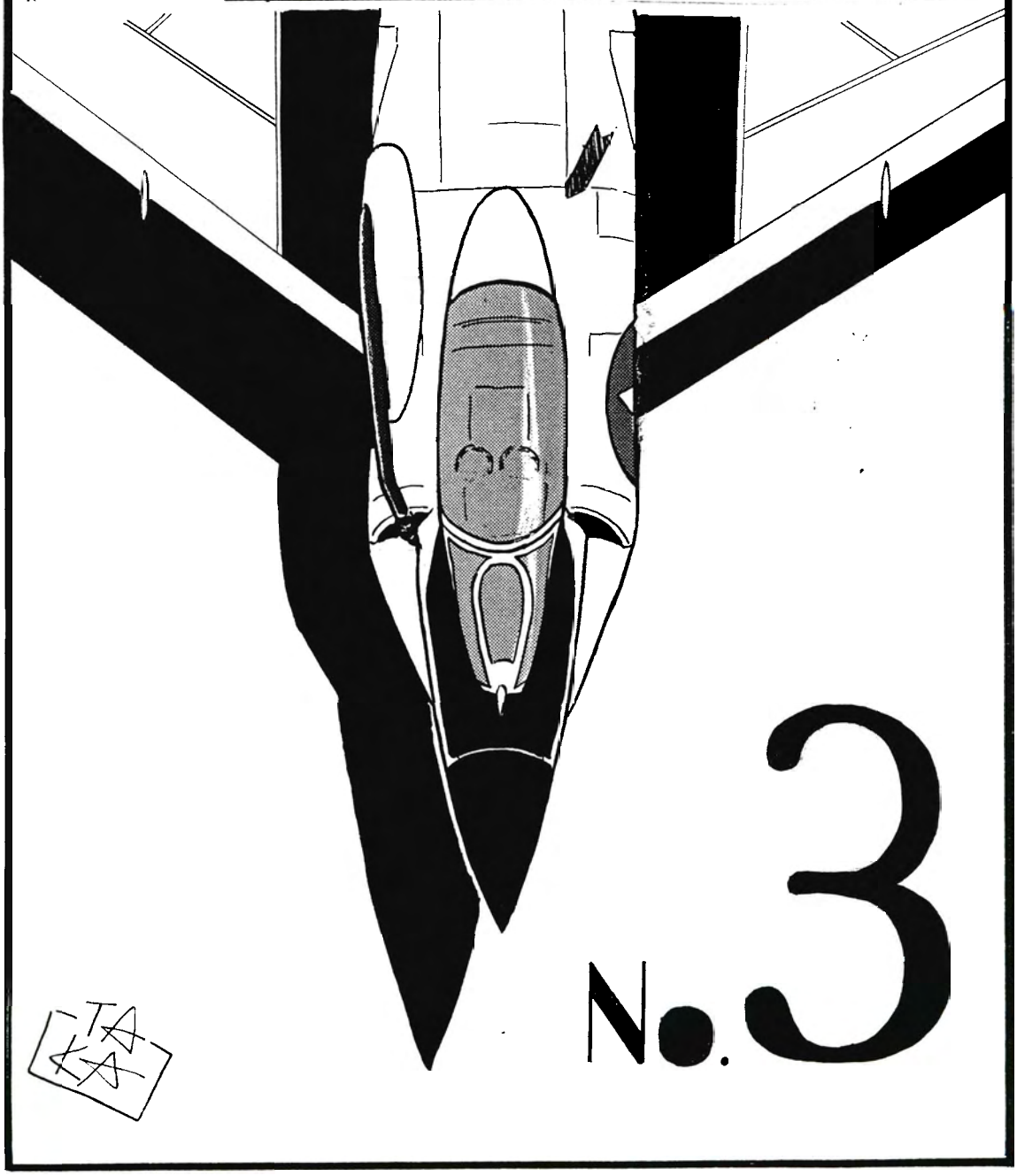
Blowers



No. 3

めにう ～MENU～

3～7	Mental Ranger	文・長船吉光 絵・ただのりな
8～10	D&Dリプレイ　いい子はマネしちゃいけないよ	空技廠横浜評議会
11～12	バトル・クラック緊急レポート	A．F．フィネクスレイ
13～20	真鶴学園風雲録　全体リプレイ 真鶴レポート	岬当麻
21～26	LOOK OUT！	EX．SYSTEM
27～30	PEACE PRESSER MAYA	文・本居こじ 絵・EPST DARIUS･5
31	特口魂	空技廠横浜評議会

※今回も都合により、ただのりなさんのコミックはお休みです。

※「真鶴学園風雲録」に参加するためには、別売りのルールブック（送料込み２００円）が必要です。今回は１０／２０までにアクションを送って下さい。

「Ｅｃｈｏで悪いか！」　by 本居こじ

早々とエコーに切り換えさせていただきやした。しかしまあ、ピースライトから来るとけっこ強いね、エコーって。吸いはじめの何本かは辛さが舌にピリピリ来るし。‥‥慣れるとこれがまたいいんだけど。やっぱ煙草はエコー。ビールはサントリーの黒ラベル。

でまあ、とりあえず一地元民としてのステートメントみたいなのを一席。

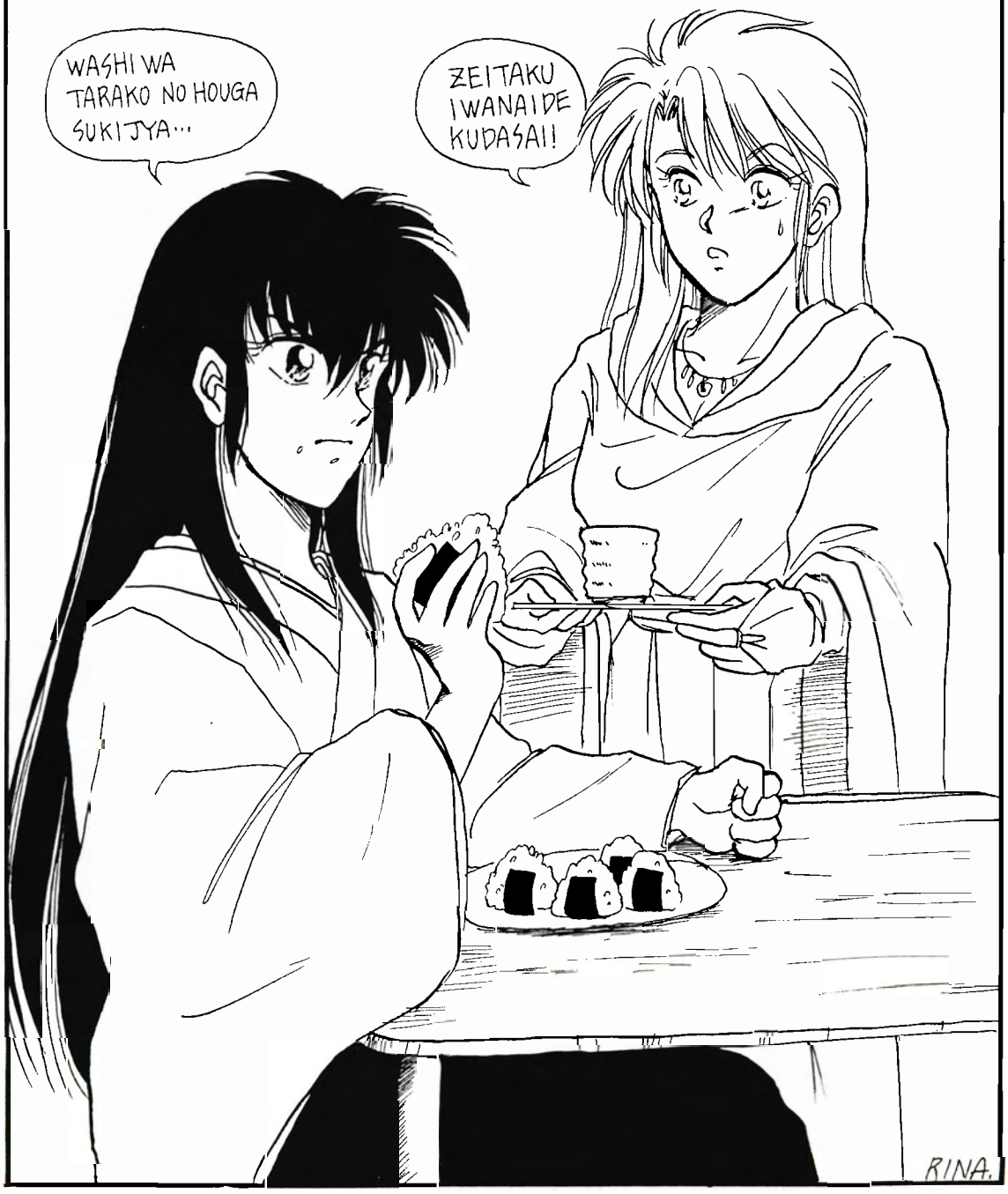
横須賀にインディペンデンスが来たのは皆さんもうとっくにご承知でしょうが、何でマスコミはああも煽るかね。二言目には戦力増強々々々々。アメリカには、ミッドウェーを廃艦にするとインディを含めたフォレスタル級より小さな正規空母がないのにね。艦載機の数が増えるのがイヤならミッドウェーのコピーを日本で造ってやりゃいいんですよ。空母配備そのものがいやなんなら、そうとハッキリ言えばいいんだな。で連中は正面切ってアメリカにケンカ売る度胸はない（そりゃ私も同じですが）から、無邪気に喜んでトムだのインディだのの写真を撮ってる連中にホコ先を向ける、と。私だって１０日は厚木に行きたかったし、１１日の朝は始発ででも横須賀なり浦賀なりへ行きたかったですよ。でもどうせロクな言われ方される訳ゃないんで、控えたんです。マスコミの質問ぜめ、反対派の撮影妨害ｅｔｃ‥‥。

そう、我々としては基地反対派の人が、「基地を歓迎する層があると米軍に安心させる」と我々飛行機ファン、船ファン、その他ＳＬＧゲーマーを十把一絡げにして「嫌な目」で見ていることも認識しておかなくては。無神経な喜び方は控えなければなりません。

結論としては、安保がある限り空母は日本に来ます。んでもって今の日本は安保がなけりゃただの成金国です。しかも安保撤廃は金の卵を産むニワトリの腹を牛刀で裂くのと同じ暴挙でしかありません。日本人はせいぜいフォレスタル級で済んで、ニミッツ級が来なかったことを釈尊に感謝すべきでしょう。あとは自衛隊の保有する弾の数（兵隊の頭数ではなく）をせっせと増やすことですナ。

Mental Ranger

文 ：長船吉光
挿絵：ただのりな

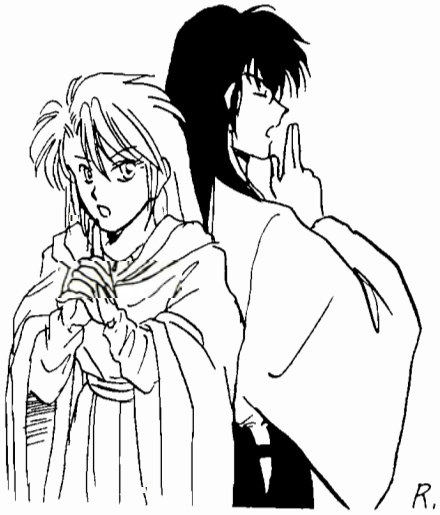


今回までの粗筋
宿場町で茶店兼人生相談所を営む司祭補　ミラマー・レキシントンは、怪しげな女術師の噂を確認する。対策を立てあぐねているうち、ひょんな事から相手が信じがたい方法で戦力を強化させていることを悟ったミラマーだったのだが‥‥

5：ミラマーは、家の掃除は念入りに行うようにさとしてバークを帰すと、すぐに店を閉じて奥の禅堂にこもり、冥想に入った。おそらく飛躍的に能力の上がっているであろうリュルカと、少なくとも互角にやり合うためには、可能な限り早く手を打つしかない。キサラもミラマーを助けるべく、術の為の道具の手入れを始めた。
やがて日も暮れ始めて、家々から夕食の香りが漂い始めた頃、ミラマーは冥想を終えた。
「事は一刻を争う」ミラマーはキサラに告げた。「果たし状を書いて転送する。急いで握り飯を作ってくれ！」
「分かりました」

ミラマーは５分で墨をすり、２５分で果たし状を書き上げた。
「町の西門外にすぐ来い。ミラマー・レキシントン」
さんざ考えた挙げ句に、これだけの文章に留めた。彼女はこういった時に、かっこを付けたがるクセが少し有る。いかに短く要点を伝え、なおかつ威厳を持たせるか。ここに彼女の意気込みは集中される。
３つに畳んだ果たし状を転移させると、彼女は食堂に戻ってキサラの握り飯を急いで腹に詰め込み、そして彼女を伴って家をでた。
「覚悟はよいか？」家の鍵を閉じる際、ミラマーはキサラに確認した。「やめるなら今だが」
「大丈夫、行きます」キサラはスタッフを構えて見せた。「黒魔術は、我々に白の術師にとっても撲滅すべき相手です。ミラマー様だけに任せる訳には参りません」
「そうか」
白魔術は、黒魔術を完全に撲滅することは不可能だろう。その逆もまたしかり。そして、宗教がいずれかの魔術を撲滅することもまた、不可能だろう。キサラとは対照的に、ミラマーはそう思っている。黒有っての白であり、白有っての黒なのだ。そして宗教はいずれの術とも深い相関関係に有り、どれか１つが無くなる時は、他の２者も消える時なのだ。既に一種の商業と化し、自己保身主義に陥り、政治的プロパガンダとして異端者への迫害を唱えるだけの各魔術、各宗教が、共倒れの危険を犯してまで、創設時の目標を達成するとは考えられないのだ。
ずいぶん早く、歳をとった考えに落ち着いたものだ‥‥。時々、ミラマー自身そう思うことが有る。しかしそれが事実であったのだ。そしてそれを悟ってしまったが故に、彼女は未だに司祭補である。
ミラマーが指定した場所に着いた時、リュルカは既にその場所にいた。
「おやおや」リュルカは余裕たっぷりに言った。「今回は助太刀付きですか？落ちぶれたものですね」
「生憎私は現実認識力が強くてな」ミラマーは腰を少し低くして、錫杖を横に構えた。「なるべく生存率は上げておこうと思うのだ」
「たかが新米の『紫』の術師を１人連れて来たからと言って、どうなるものでもありませんよ」
「おやおや、心理作戦かい」ミラマーは口元に笑みを浮かべた。「余裕なことで」
言い終わるや否や、ミラマーとキサラはリュルカに横を見せるように背中合わせに立ち、印を結んだ。
「何!?」続くように天上から降った光の束に、リュルカは一歩後退った。
「ナマス・サルヴァジニャーヤ。アールヤーヴァローキテーシヴァロー‥‥（中略）‥‥ターヤー・ナ・プリタグ・ルーパム。‥‥」
ミラマーとキサラが延々と呪文を唱えるうちに、光の束は４本にまとまった。真上から見ればそれは、ミラマーとキサラを取り囲む正方形の角の位置に垂直に立っているのが解っただろう。そして、その１辺はリュルカの４歩手

前に位置していた。
「何だ、これは！」
毒付きながらリュルカが光の中へ踏み込もうとした途端、彼女は物凄い勢いで弾き返された。
「無駄だ！」ミラマーは怒鳴った。「この光の中に、黒の術師は入れぬ！」
「なるほど、シールドか」リュルカはスタッフを構えた。「甘いわ。破ぁ!!」
いとも簡単にシールドは破られた。ミラマーは鼻白んだ。まさかここまで上達していたとは。
「ヤバい」ミラマーは押し殺した声で呻いた。「こいつァまずい。もの凄くヤバい」
「先手必勝ですね」キサラは素速くミラマーから離れた。攻撃を受けたときのダメージを分散させるためだ。「やァっ！」
振り降ろされた彼女のスタッフから、雷光が走った。‥‥しかし、それはたやすく止められた。リュルカが片手を上げただけでその周囲は結界を成し、雷光は正確に折り返してキサラをものの見事に直撃した。‥‥彼女は失神してその場に崩れた。
（くぁーっ‥‥！）
ミラマーは額を押さえた。早くも戦力半減である。
「どうした、貴様らの実力はこんなものか」リュルカは豪笑した。「こんなものでこの私に挑戦するとは笑止千万、片腹痛いわっ!!」



「魔力が足らないなら」ミラマーは手に唾した。「体当たりしかあるまい」
言うが早いか、彼女は錫杖を槍のように構えて突進した。
「往生、せやぁ――――――っ！」
「無駄だっ!」
今度はリュルカの指先から雷光がほとばしり、狙い違わずミラマーの身体に命中した。
「ぎや！」
おどるようにミラマーは地面に転がった。痙攣する彼女の頭に右足をのせて、リュルカは勝ち誇ったように高らかに笑いだした。
「身のほど知らずの馬鹿どもが！」踏み付ける足に力が加わり、ミラマーの顔が痛みでゆがんだ。「こいつで１００人！我が魔王フェルディナンド様への生贄の最後に、白魔術の、それも僧侶を捧げることが出来ようとは！――――――なに！」
リュルカの顔が引きつった。想像を超える力でリュルカの足が掴まれ、あまつさえ持ち上げられ始めたのだ。
「甘い‥‥」ミラマーは地獄の鬼もかくや、と言うほどのドスの効いた声で

言った。「いかに自分のまわり以外の時間を遅らせて、自分だけ魔力を上げようとて‥‥実戦経験が無きゃただの空手形だという事が、解らぬか」
「なんと‥‥！」
もはやリュルカの足はいずれもミラマーの顔には無い。ミラマーは錫杖を支えに、よろよろと立ち上がった。
「１００人‥‥１００人か」ミラマーは憎悪に歪んだ面持ちのままで、にッと笑った。「面白い」
「どうしようというのだ、その力で‥‥貴様に勝ち目は無い！」
「やかましいぃ――――――ッ！」ミラマーは右手の中指を突き上げた。「よいか！この私は、かつてベルゲングリューンの森の奥で、マラヤと戦って首を取ったこともある。マラヤがどれ程の奴か、貴様なら知っていよう？」
「あの‥‥先代の高級攻撃呪文の長‥‥か‥‥？」
「いかにも」さっと腰を低くして、戦闘態勢に入りながらミラマーは不屈な笑みを浮かべた。「別に貴様如きの、姑息な下っ端なんぞ、なんぼ相手にしたところでどうということもない！」
「そうか‥‥貴様はマラヤをも殺ったのか」ククっ、とリュルカは笑った。「いよいよ手加減する訳にはいかなくなったな」
「そう言って私の錫杖に崩れ去った者が何人いた‥‥なっ！」
リュルカがおもむろにローブを脱いだ後の姿を見て、ミラマーは驚愕の叫びを上げた。‥‥それは一糸まとわぬ肌もあらわな姿であり、体全体には――――――すなわち両腕、両足、体の全面、そして顔にさえも――――――――整然と古代魔法文字が現われたのだ。
「貴様の正体‥‥まさか‥‥否、そんなはずは‥‥！」ミラマーは狼狽した。「どうした、何を困っている」腕組みして、余裕の表情で彼女は軽蔑したような笑いを浮かべた。「‥‥我が名はトビリシ＝バクー！フェルディナンド様の一番弟子！貴様如き一介の司祭補の相手ではないっ！」
「言ったな‥‥」ミラマーはさすがにむカっとなった。「言ったな‥‥では問う！１００人の生贄をすべて納めた後はどうするつもりかッ！」
「フェルディナンド様は私に永遠の命とこの世の支配権を賜ると申された」
「甘い」少しの光明を見出したミラマーは苦笑した。「魔王が‥‥フェルディナンドがそんな約束を守ると、本気で考えとるのか、貴様は」
「何だと！」リュルカ、否、トビリシは身構えた。「フェルディナンド様を愚弄奉る者は許さん！」
「今頃は同じ約束を胸に抱いた亡者どもが、ごまんといるだろうて」ミラマーは肩をすくめた。「どうしてこうだかね。人間、いざ欲しいものを問われれば、金、命、そして権力だ。それは、この私とて人の事は言えん。しかしね。しかし、だ。少なくともそれを、私は『濡れ手に粟』式に手に入れようとは思わん。‥‥ふん、１００人か。ご苦労なこった。せいぜい貴様が１０１人目の生贄になるのがオチだろうて。‥‥１００人殺したって、太るのは魔王だけじゃ」
「黙れっ！幻惑しようとしても、そうは行くか！」
ミラマーはまた肩をすくめた。
「ま、そうおっしゃるなら私もこれ以上宣教する気はないが。１つ付け足させてもらうと、私は一介の司祭補なんかじゃない。私はミラマー・レキシントン。唯一フェルディナンドに勝った者」
「何だと！」
「奴もそんなことは話すまい」ミラマーは錫杖を持ちかえた。「都合が悪いからな」
「なんと‥‥」
その時だった。ようやく、キサラが起き上がった。
「キサラ！大丈夫か？」
ミラマーは大声で訊いた。しかし、彼女の様子はさっきまでとは違っていた。
「人間‥‥どもが‥‥」彼女はブツブツと呟いていた。その声が、急に高まった。「思い知るがいい！愚か者め！」

ミラマーとトビリシはその場に立ちつくした。キサラの姿が、叫びと共に全長１０ｍはあろうかという、巨大なゴールドドラゴンと化したのである。
「ゔっ‥‥そ‥‥っ」ミラマーの顔が引きつった。「そっ、ん、なっ‥‥」
急に夜空に黒雲がたちこめ、稲妻が走り、風が出てきた。
龍が激怒の頂点に立っていることは誰の目にも明らかだった。

ドおッ！

龍の口から空へ炎の柱が噴きあげられた。形容しがたい咆哮があたりに轟くと、風は瞬時に暴風と化した。
――――――ヤバいな。
直感したミラマーは、すぐさま火避けの結界を張った。一方のトビリシは、この龍を見て半ば狂乱状態に陥っていた。
「素晴らしい！」彼女は喚いていた。「ゴールドドラゴンとは！フェルディナンド様もさぞかし大喜びされるであろう！」
「大馬鹿もの！あんぽんたん！あほんだら！」ミラマーは声を限りに罵倒した。「その龍は、貴様がタメ張れる相手ではないぞ！」
「いやいや何を言うか‥‥」トビリシは自我を失っていた。「偉大なるフェルディナンド様は、この私に何者も凌駕することのできない魔力をお授け下さった！この私に不可能という文字は無い！」
「では勝手に死ぬがいい！」ミラマーは喚き散らした。「言っておくがな‥‥貴様勝負を捨てる気か？そしてもう一つ言う！この私如きを倒すのに、一体どれだけの時間をかけとるかッ！」
トビリシは振り向いた。何かを言おうとして、口を開きかけたが‥‥そのスキが、命取りとなった。
龍の口からまたも炎の柱が噴き出した。そしてそれは、少し遅れて天から降った稲妻と共に、トビリシを直撃した。
「ゔっ！」トビリシは一瞬の間だけ、「魔力」によって、生きることができた。「ふ‥‥フェルディナンド様に‥‥栄光あれッ！」
最後の叫びが終わるか終わらないかの内に、トビリシは崩れた。

６：「あっけない‥‥土に、帰れ」
錫杖を一振りすると、やがてトビリシの遺体は消滅した。そしてその頃には、キサラももとの姿に戻っていた。
「心理作戦とは見事」ミラマーはサムアップした。「龍に化けるとは」
ところが‥‥キサラは、力無く首を振った。
「長いあいだ‥‥お世話になりました」彼女は言った。「正体を見られた以上、もうこれ以上ご面倒をおかけする訳には参りません」
「何？」ミラマーの目が点になった。
「私、さっきの姿の方が本来の姿なんです」
「‥‥？」ミラマーはようやく状態を把握した。「何と‥‥まあ」
「と、言うのはウソ♪」キサラは笑いだした。「龍に化けるのはちょっときつかった‥‥。にしてもミラマー様、本当にフェルディナンドに勝ったんですか？」
「そんなムチャな」ミラマーは肩をすくめた。「マラヤの方は、お主もいたから知っているように、本当だけど」
二人は互いに顔を見あわせた。そして、どちらからともなく笑いだし、すぐにそれは大笑いになった。　（完）

いい子はマネしちゃいけないよのコーナー

※これは久しぶりにうちでやったＤ＆Ｄのリプレイです。配役は次の通り。
マスター：香津美どぶろく
剣士テクノヴォート♂：長船吉光　　僧侶レキシントン♀：本居こじ（コーラー）
盗人ヴァーン♂：岬当麻　　術師ミレニアム♀：宇垣麻美

註：これは、かなり内輪なのでできるプレイです。コンベンションなどでは絶対に真似しないでください。（言われなくてもする奴ぁいないか）

（一度全員１ｄ４する）
香：‥‥はい、偶数が酒場、奇数が宿の食堂。提督、もっぺんダイス振って。
岬：あ、今こいつプレイヤーの名前呼んでやんの。ＸＰマイナス１００！（※ローカルルールです）
香：マスターにンなもんないでしょ！
岬：じゃ脱げ！わはは－！（長船、無言で殴る）
菊：２だ２。酒場だぞ。
香：‥‥はい。酒場で皆が飲んでると‥‥
レ：俺は酒飲んでないぞ。戒律だから。
ミ：私も。
香：はいはい。‥‥で、飲んでると、奥から亭主が出てきて、言いました。「‥‥あんた方、支払いは大丈夫だろうね？」
レ：大丈夫でしょう、一応１０プラチナあるから。
香：すると亭主は、あきれたように首を振って言いました。「あんた、ここの相場を知らないね？外の人で１０プラじゃ、最初の５本でもう赤字だよ」
テ：なぬ？
ヴ：初めて聞いた。そうか、最初に振らしたダイスは、飲んだ数だったのか。やられたぜ。
レ：‥‥テロかよ。あの、足りなさそうなんですが‥‥
亭主：じゃ体で払ってもらおうか。実はこの村の外れに炭鉱があるんだが‥‥
ヴ：出た！いつも通りの強引な導入部！イヤーお見事！
レ：いいから！‥‥で、何だって。石炭掘れって？
亭主：いえね、このところゴブリンどもが出るとかで、採掘が滞ってるんですよ。ちょっち退治してくれない？中にいるの全部退治してきたら、酒代はチャラにしてもいいけど。
ヴ：その炭鉱と、亭主と、どういう関係があんの？
亭主：いやー、炭鉱主と賭けしてまして、あと２日以内にゴブリンどもを退治できたら、そのヤマが私のものになるんでね。‥‥いや、イヤなら結構。ここのお客はみんな炭鉱の人間ですから、その気になればみんなでツルハシもって‥‥
レ：わかりましたよ。行けばいいんでしょ。そのかわり酒代チャラの件、確かですね？
亭主：そりゃもちろん。
ミ：はい、飲んだくれてないで。行くよ！ゴブリンなら酔っ払ってても殺れるでしょ！
ヴ：キレがいいからキリがない。香りがいいからやめられない。罪なビールだね。ウヒヒ。
亭主：お客さん、カンバンですよ！
ヴ・テ：やだ！わはは－！
マ：店の客がツルハシ持ってぞろぞろ立ち上がり始めたよ。
ヴ・テ：さぁーて、行こうかー‥‥ちょーっち待て。どこから出したんだ、そんなもん。
マ：（無視して）行くのね。
ミ：ずんずんずん‥‥
マ：はい、炭鉱の入り口に着きました。
レ：入って様子を見るよ。
マ：‥‥んとね、ちょっと４面振って。

レ：２。
マ：えーと、いきなり落とし穴があってね、見事にはまったよ。
レ：おーい、出してくれえ！
ヴ・テ：さーて、犠牲者も出たし、そろそろ帰るかー。
マ：大丈夫よ、自分で出られるから。ただ腰を打ったから、ＨＰをマイナス１してね。
レ：げ、テロかよ。
キ：とにかく前へ進むからね。

（この後、廃坑に迷い込んだりしてかなりの時間が経つ）

レ：ちくしょー、こんな不毛なダンジョン初めてだぜ。こんだけ歩いて銅貨一枚見つからねー！おまけに敵一匹見つからねー！
テ：まあ、一番健全な洞窟探検ではあるだろう。
ヴ：自説を曲げてでもいいからよ、ゴブリン大虐殺やりてーよー。
マ：‥‥はい！ランタンの明かりが届くか届かないかのところに、なにかキラっと輝くものが見えました。
レ：コインか？
マ：うーん、そんな風にも見えるけど。
ヴ：うおお、カネじゃーっ！
レ：おい、待て！
マ：‥‥飛びついたんね？（岬、うなずく）‥‥いきなりヴァーンの足がロープの輪っかに吊り上げられたよ。続いて、カラカラカラーっと木が鳴り始めた、と。時代劇なんかでよくある、原始的な警報装置ね。
レ：テロかよ！ほら戦闘だ戦闘だ、とっとと帰ろう。
ヴ：助けろよ！
レ：安心しろ、お前が料理になって敵が油断したところを一網打尽にしてやるから。
ヴ：オニ！悪魔！
テ：褒め言葉と受け取っておこう。
ミ：賢明な策と言って欲しいわね。
マ：もめてるうちに、ゴブリンに取り囲まれたよ。‥‥んとね、１０匹いるけど。
レ：テロかよっ！しゃーねーなー、じゃ姿を消したよ。あとよろしく。
ミ：♨こいつは～‥‥スリープかけるからね。‥‥はい、全員寝たぁ。
テ：んで、それを次々に三枚におろす‥‥
レ：よせよせ。ロープで縛っときゃいいだろ。
テ：でランタンであぶるのか？‥‥ゴブリン相手にゃいい趣味とは言えんが‥‥
レ：するか！放っといたって餓死するわい。

（そしてあとは何も見つからなかった）

マ：‥‥で、帰ってくると、亭主は言いました。「お疲れさん。じゃあな」‥‥はい、おしまい。
岬：おーい、ちょっと待てー！ありか、こんなの。
香：だってしょーがないじゃない、セーちゃんが帰ってくるからシナリオ作れって言われたの、昨日の夕方よー。
長：連絡するのが遅かったのは謝る。旅費の工面が最後まで危なかったからな。
菊：無理を言ったのは悪かった。‥‥まあ、仕方ないだろ。
岬：やだ。俺は納得しないぞ。おんどりゃ、脱げー！（長船、無言で殴る）

プレイ総時間３時間半‥‥

読　者　ア　ン　ケ　ー　ト

ここのページを切り取るなり、コピーするなり（どうせ裏をとっときたい人ぁいないはずだけど）して、１０月末ごろまでに送って下さい。内部資料として活用しますので、マトモに書いて下さいね。

フリガナ
お名前：　　お歳：　　歳　　性別：　男　／　女

住所：〒　　－

職業（バイト併記のこと）：

パソコンについて：持っていない／持っている　機種：

好きなゲーム：

※ここから先は「意味なし」アンケートです。まっ、読者はどうせ男ばっかだから。

押し倒すならどちらを選びますか

モーリー・ラングフォルド（ボーグマン）／ワカメちゃん（サザエさん）

踏みつけられるならどちらがいいですか

エルピー・プル（ガンダムＺＺ）／レビア・マーベリック（サイレントメビウス）

二択です。どっちが好きですか

・手旗信号／モールス信号　・トム／ジェリー　・小柳トム／ジェリー藤尾

・東急／西武　・名鉄／近鉄　・阪急／阪神　・国鉄／JR

・太陽にほえろ！／特捜最前線　・アドバンスド大戦略／スーパー大戦略

・ＰＣ９８／Ｘ６８　・ＬＰ／ＣＤ　・くりいむれもん／レモンピープル

・レモンピープル／エルピー・プル　・ＪＡＬ／ＡＮＡ　・Ｆ１／Ｆ９１

・エリリン／エリツィン　・星一徹／バカボンのパパ　・安田／住友

・三菱／三井　・小堺一機／関根勤　・三遊亭楽太郎／三遊亭円楽

・林家木久蔵／林家こん平　・ブルーウォーター／カメリアダイアモンド

・Ｄ＆Ｄ／Ｔ＆Ｔ　・電電公社／ＮＴＴ　・ゴルバチョフ／エリツィン

三択です。どれを選びますか

・ＮＥＣ／富士通／シャープ　・松下／東芝／日立　・カシオ／セイコー／シチズン

・ＴＤＫ／マクセル／ソニー　・サニー／カローラ／シビック　・生麦／生米／生卵

・水戸黄門／遠山の金さん／銭形平次　・天道かすみ／天道なびき／天道あかね

・日産／トヨタ／マツダ　・ホンダ／いすゞ／ダイハツ　・コーヒー／紅茶／烏竜茶

・もう誰も愛さない／東京ラブストーリー／１０１回目のプロポーズ

バトル・クラック緊急レポート　第3回

by　A．F．フイネクスレイ

第4戦、フロンテイア・ゲートGP。今、フェリオン・スタジアムでスタートが切られる…。
「えっ、チェリス、エントリーするの遅れて参加できないですってー。どうすんのよ。だから言ったじゃない、私がエントリーしとくって。」
「だから謝ってるでしょ。私だって参加したかったんだから。」

それは数日前、ちょうどエントリーの締切日だった……

「チェリス、マシンばっかりいじってるのもいいけど、ちゃんとエントリーしてきた？」
「えっ、エントリー？……！も、勿論よ。ちゃ、ちゃんとしたきたわよ。」
「それならいいけど。頼むわよ、今度こそ決勝に出たいんだから…。それよりチェリス、そのミサイルポッドやめなさいよ。今回は『不要な武装の禁止、可能な限り軽量化しマシンのパワー・ウェイトレシオを上げること、ミサイルポッドの禁止、ブースターは1個まで』って言っておいたでしょ。」
「わかった、わかった。ジュンナ、悪いけどちょっと出かけてくるね。」
「本当にわかってんのかなチェリス…」
　チェリスがどこへ出かけたかというと…
「（あーあ、完全に忘れてた。今日が確か締切日だったんだよね。急がなきゃ。）」
ＦＩＢ事務局に向かっているのである。今までマシンのことばかりでエントリーするのを忘れていたのだ。ジュンナが「エントリーしに行ってくるけどチェリスの分もやってこよーか？」と言ってくれたのだが、マシンいじりに夢中だったチェリスは「いいよ、自分でやっとくから。」と断ってそのままだったのだ。
ＦＩＢ事務局到着。5時１５分、事務局は閉まっていた。5時で終わってしまうのだ。
「あー、間に合わなかったか。どうしよう、ジュンナにはエントリーしてあるって言っちゃったし…。もうこうなったら開き直るしかない。帰ってジュンナに謝ろう、うん。」
そうは思ってみたものの、なかなかきっかけが掴めず今日になってしまったのだった。
《チェリスを知っている者ならこうもあっさりと諦めるのを見て不思議に思うかも知れないが、ＦＩＢ事務局は別名「校門」と呼ばれ、時間きっちりに閉じ、遅れてきた者には容赦しないのだ。だから諦めてしまったのだ、あのチェリスが。》
「全く、チェリスは…」
「ごめん。」
「ジュンナ、そんなにチェリスを責めちゃ可愛そうだよー。チェリスだって出たかったんだからさ。それよりも今やらなければならないのは今回のレースをどうするかってことなんだから。」
「そうですよジュンナ、アイフの言うとおりこれからのことを考えなくてはいけません。」
「そうよね、アイフとシャルルさんの言うとおりよね。チェリス、今度からは気をつけるのよ。」
「うん、ごめんねみんな、迷惑かけちゃって。」
アイフにとってこんなチェリスを見るのは初めてだったようだ…。
　それはともかく、他の人はというと…メカニックのおユキ姉さんはどうやらワークス・ライダーの追っかけで忙しく行方不明、もう一人のメカニックの八神は前回お知らせした怪しげな装置の最終チェックを行っていた。ジュンナ曰く「みんな勝手なことばかりして、やっぱり『楽しくなければ……』がいけなかったのかしら。」ため息をつくしかないようだ。

午前１０時、予選ヒート開始。ネットプラスが出場するのは第４ヒートであるためまだ少しの時間が残されていた。この時はさすがにみんな真剣で各自最終チェックを行っている。が、チェリスだけは別だった。「ここにいてもやることないから客席に行ってるね。」とか言って観客席に行ってしまった。ジュンナは何やら文句を言っていたようだがチェリスには聞こえてないようだった、「全く反省してないんだから…」

耳を聾するマシンの爆音、割れんばかりの人々の声援。チェリスはいつもとは違う空間に来ていた、チームメイトが走るであろう目の前のコース、今は第２ヒートが行われている。これもレースなんだ、チェリスはそう実感していた。

そして次々にスケジュールが消化されて行く。そして第４ヒート、ネットプラスの出番である。
第４ヒートは８チーム１６台からなる。その中でアイフとジュンナは１４、１５番グリッドに位置する、後方からのスタートである。

静かだったピットエリアにエア・スターターの咳込むような音が響いた。鼓膜が破れんばかりの轟音が満ちあふれる。

狭いコックピットに体を押し込むと、一転して世界は変わっる。目の前には無骨な、それでいて洗練されたインジゲーター・パネル、その前には安全性、空気抵抗を考えて取り付けられた強化ガラスがあった。本来あるはずの７点式フルハーネスのベルトはなく、伸縮可能な４点式のベルトがボディースーツに守られた体に結ばれる。ヘルメットをかぶる、バイザーにはシャルルが開発した、ＳＪＳ（Ｓｉｔｕａｓｉｏｎ　Ｊｕｄｇｅ　Ｓｙｓｔｅｍ）の起動完了を知らせるサインが点灯する。
「油温、排気温、ＯＫ。ＣＳＰ両系統およびＳＪＳ異常なし…」

軽くアクセルを捻ると、回転計の数値が一気に跳ね上がり、エンジンが唸りを上げる。レスポンスは鋭い。
『…ザッ…大丈夫？…』

インカムからメカニックのおユキ姉さんの声が響いた。片手を上げて合図をし、シフトをＨ（ホバー）に入れる。固定フックが外され、機体はふわりと持ち上がった。

ゆっくりとピット・エリアを離れて行き、スターティング・グリッドに整列する。

各車フォーメーション・ラップに入る。フォーメーション・ラップの間に各チームはそれぞれのフォーメーションを組んでいく。ネットプラスはアイフが前でジュンナがその後ろについている。

ゼロアワー。各車一斉に加速、第１コーナーに殺到する。アイフとジュンナは前に出ることは出来ずそのままの位置をキープ。前に２台後ろに１台、挟まれる形となった。第３コーナー手前、
「俺が前の２台に仕掛ける、その隙に前に出てくれ」　「…わかったわ」
第３コーナー、アイフが強引にインに飛び込もうとするのを防ぎに、マシンをイン側に寄せてくる。
「悪いが行かせてもらう」　アイフはマシンをアウト側にスライドさせ相手のマシンにぶつける。マシンは制御を失いもう１台を巻き込んでチューブに激突する。そこをジュンナが難なく躱して行く。
現在１０位、前に第２グループが見えてくる。
「同じ要領で行く、ついてこい！」　「ＯＫ！」
さすがにアイフでも３機を相手するのは辛かった。チェーンソーを躱し損ねてバランスを崩してしまったのだ。そのまま３機は団子になってチューブに激突する。１機はぎりぎりで躱して行ったようだ。
「アイフ！」　「構うな！行けっ！」　ジュンナは残り１周を一人で走ることになってしまった。
けれどもジュンナは何事もなくチェッカードフラッグを受けた。

結果はアイフ、リタイア。ジュンナ６位に終わった。決勝進出の夢、次回に持ち越すこととなる…

真鶴レポート

坂井法子はご機嫌斜めだった。ホーネットを持ち込んで、艦載機としてハデに飛び回るのを期待していたのに、実際はギリギリ一杯の面積しかない青函連絡船の後部甲板からコンピューターの力を借りて離着艦をやらなくてはならない。しかも行動半径は比較にならないほど小さい。だからというわけではないが、彼女は外部生が内部生より格下であるという真鶴の不文律に怒りを覚えていた。

こうなったら最強のシーハリアー乗りになって、あいつら（内部生）を見返してやるんだから！

坂井は、心に誓うのだった。誓いには実践が伴わなければ意味がない。そこで彼女は高級機に乗っている内部生に近づき、片はしからＤＡＣＴ（異機種格闘戦訓練）を頼みこんでいったのだった。やがて彼女はある意味で広く顔をおぼえられて相手には困らなくなったものの、大きな壁が立ちはだかった。

要するに所詮シーハリアーでは、慣れたものが操るＦ－４、Ｆ－１８、Ｆ－１５などにはてんで歯が立たないのだった。一度だけ明らかに「まぐれ」でＦ－１６に勝ったことがあるだけだ。いわゆる「奇策」が必要なのは明白だったが、割とまっすぐな精神の持ち主である坂井にとって、そんなものは思い付きようもなかった。まして戦闘中である。期末試験で一学期の活動が終るころまでには、彼女の挑戦は空しい同情と嘲笑とをもって受け入れられるようにさえなっていた。ただ、それを傍で興味津々と観察しているものがいた。他でもない。真鶴女子部ＭＦ主将、栗田はるなである。

「あの子いーじゃん。あれであとプラス１があったら、ＣＴＯＬ（普通機）空母に移してもいいと思うけどね」

二学期初めごろ、まだ「空しい挑戦」を続ける坂井を見つけたはるなは幕僚の長門洋子に、そう漏らしている。

また、坂井は二回男子部へ殴り込みをかけている。一回目は散々だった。なにしろ、防空レーダーを避けることに気を使いすぎ、低空を長く飛びすぎたせいで計算が狂い、ガス欠を起こしかけたのだ。そうなると後は「道場破り」どころではない。冷や汗をどっさりかかされて、どうにかそばにいた男子部ＭＳのヘリ搭載護衛艦の後部甲板に滑り込み、女子部領海ギリギリまで送ってもらった上燃料をわけてもらい、どうにか「摩周丸」に帰りついたのだった。その時初雁は無言だった。

で、文化祭の空き時間に、初雁つばめは、女子部の校門に立っていた。ただ立っていたのではなく、首には画板を下げている。署名運動だった。

「男女校舎間に地下鉄を敷設する運動に、署名をお願いしまーす！」

ちょうど当番なのでしかたないのだが、恥ずかしいことに変わりはない。勢い、声は小さくなりがちだが、生徒会応援委員会からの応援要員の大声が羨ましくもあった。

彼女は実のところ、忙しい身なのである。それも立場上、署名運動と相反する内容の。つまり、彼女は男女両校舎それぞれの港を往復する連絡船の船長だったのだ。地下鉄が完成すればこの仕事はなくなる。彼女の船は基本的に青函連絡船なので、こういうときにはこういう仕業に駆りだされるのだった。

生徒の間では、地下鉄の建設は十中八九ムリであるとの見方が一般的である。いかに生徒会が必要な財力を備え、模型部が好意的であるとしても、敷設するには一旦地面を掘り返さねばならず、それには学校側の同意が要るからだ。そしてその学校は首を縦に振る気配が一向にないのだ。

さかのぼって文化祭前、沖田悟は艦長の真田に、ある計画を持ちかけている。
「なあ、パレードのとき、花火打ち上げないか？」
「昔、今高２の宇垣さんがさ、似たようなことやったんだよ。そン時どうなったか知らないだろ？」彼ははっきりと乗り気でない。「特別に便所と風呂４週間だぜ。オレぁやだね」
しかしそれでめげなかった彼は、砲術係の特権を使い、誰にも黙って自分の艦「昇龍」の弾庫に、何発かの自作の花火を忍びこませたのだった。そしてその一方で、同時に編入された菅原絵馬にも同じ話をもちかけた。
「‥‥なあ、俺の計算では絶対大丈夫なんだ。頼むから、何発か混ぜといてくれよ」
「いいけど、悟。これ大丈夫なのか？この前のカリウムみたいな事にならないだろうな？」
当然の疑問である。彼は実際、編入初日に彼の「茶目っ気」のお陰で大火傷を負いかけたのだから。それでも最終的には、沖田自作の花火の搭載を受け入れたのだった。
しかし当日、沖田はがくぜんとさせられた。何と自分の乗艦「昇竜」が、停泊展示すらされない「アブレ船」の中に入っているではないか！しかも風紀委員の胸章がある中２生が何人かで艦のまわりを固めている。実は真田が危険を嗅ぎとり、学園祭直前に顧問と相談して「昇竜」をパレードから外させたのだった。‥‥結果としては、それが犠牲者の数を減らすことになった。
学園祭を目前に派手な企画を打ち出したのは、坂井法子も同じである。ただ、こっちの方ははるかに穏便と言えた。つまり、彼女は乗艦「摩周丸」の艦長（自らは船長と称した）初雁に、艦載機シーハリアーによるアクロバット・ショーをやろうと持ちかけたのだ。
「うーん、いいんじゃない？航路の見せ物としてはベリーグーよ、それ」
初雁は乗り気だった。問題は当のクルーたちだ。アクロをやるほどのウデはないからと、頭から反対してかかってきたのだ。だが結局、ＭＦ主将の栗田はるなまで巻き込んだ静かな大騒動に発展したあげく、坂井も含め３機（定数６）でショーは行われることになった。

井村真知子は文化祭初日、何もすることがないので主港に行ってみた。軽巡「昇竜」がアブレ船として繋留されていることを知ったからである。珍しい名前だな、とその名を聞いたときから気になってはいたのだ。‥‥だが、行ってみて失望した。ただの「阿賀野」級軽巡洋艦だったのだ。あとは模擬店やサークルの展示を冷やかし倒すだけの二日だった。

その事件が起きたのはちょうど二日目の夕方、初雁が女子部からの客を乗せて男子部主港に入港してきた時のことである。例によって展示艦隊が縦列隊形で逆進してくる。ただ学園祭の大トリに入っていることもあって総旗艦まで繰り出しているせいで、見る側への迫力は今までと比較にならない。‥‥左舷側へ避けるように相手が面舵を切るころに、男子部艦隊先頭の駆逐艦が第一発を発射した。歓迎の礼砲である。続いて第二発、第三発‥‥とほかの艦も続けて発射していく。異変が起きたのは四番艦、重巡「カンバーランド」が砲身をもちあげたときだ。あまりのことに初雁は全身が石化して、危うく回避指示が遅

れるところだった。
「‥‥ぅ、右へ一杯！右スクリュー逆転いっぱい！」
同艦砲術係の菅原には、何が起こったのか大体の見当はすぐついていた。ただ、発することができたのは次の一言だけだった。
「うおごわ――――――っ!?!!」
弾が例の花火の番になったとき、タイミングが妙に遅すぎた。続いて、彼のまわりがすべて真っ赤になった。ショックが来たのは、ややあとのことだ。それからあとは、何にもおぼえていない。
――――重巡「カンバーランド」爆沈。艦長以下全員火傷と全身打撲で全治１週間。「摩周丸」と続航していた男子部旗艦の「大和」型戦艦「相模」が、それぞれ破片をスクリューに巻き込んで少破した。

沖田は日々、研究活動を怠りなく続けている。事件のあとで化学部を除名になったにもかかわらず、怠りなく続けている。あるときはもの凄い刺激臭が体からし、またある時にはコゲ臭いこともある。聞けば「アンモニアから香水を作る」「水素からジュースを作る」などという奇想天外な計画ばかり。だから、彼が編入後大した間もおかずに風紀委員からマークされ、尾行と張り込みが付きだしたのも無理はないことではあった。文化祭が終った数日後も、彼は寮でやはり実験を行っていた。いつもは彼につきあっていた同室のものも、朝から何故かいない。その理由は昼過ぎ明らかになった。夏期略装に統一された、鋭さばかり感じられる生徒３人が、ノックするなりいきなり彼の部屋に踏み込んだのだ。見れば、腕章と胸章には「風紀委員」とハッキリ書かれているではないか！
「沖田悟、だな。お前の寮内の秩序を乱す行動は、我々生徒会が許容できる範囲を大きく逸脱している。我々は真鶴学園生徒会の名の下に、この部屋の実験道具並びに試薬一式を没収する」
高３生が有無を言わせぬ棒読み口調で告げたのを合図に、整備委員の記章を付けた生徒たちがドヤドヤと踏み込んで、持ち込んだ段ボール箱にありとあらゆる機材類を詰め込み始めた。今まで試薬が入っていたビーカーも、窓から中身を捨てて放り込まれる。アルコールランプもご同様だ。
「何するんですか！」
彼は反抗するが、誰も相手にしない。いいかげん、連日連夜の悪臭・爆発騒ぎには参っていたのだ。さっきの高３生が、冷たく言った。
「心配すんなよ。これは生徒会で預かる。卒業なり退学なりする時にゃ返してやるから」

伊藤早苗が富山の砺波から着いたのは、そのころだった。真鶴の駅に新入生歓迎委員会の高１が迎えに出ていたが、なにしろ事情がわかっていないから、危なく行き違いになるところだった。向こうの方で写真と照合して、伊藤が小田原行き（逆方向）のバスに乗りかけたところを捕まえたのだ。
話を聞くと内部生らしい。歓迎委員会は、中２以上の内部生の有志で自主的に構成されているらしいことも、わかった。ずいぶんと長いポニーテールの、色白な子で、しかしその割にはかなり活発とした感じを、伊藤は受けた。
「‥‥ああ、言い忘れてたけど私は永野っていうの。よろしくネ」

「永野、なに？」今度は本当のバスに乗ったころから、伊藤は何か彼女に対しては解放できる「もの」の存在を内心に感じていた。
「伊勢よ。‥‥ヘンな名前でしょ。クスッ」
彼女は鼻で抜くようにして、くすぐったそうに笑った。しかし伊藤には、もはやその言葉も聞こえてはいなかった。理由は、伊藤にもわからない。やがてバスを降りて、事務で手続きをとっている間も、彼女はずっと上の空だった。

二度目の道場破りのときは、ガスの計算もガッチリやった。武装は一切積めなかったが、坂井の目的は技の向上にあったのであってそれ以外の何物でもなかったから、それでいいはずだった。そして彼女は、ある日「摩周丸」が出航したとき、再び飛行目的を偽って飛び立ち、低空飛行に入ってＩＦＦを切った。しかも小細工をうった。男子部領空に入った時、レーダーに映る高度に上がってから、宿敵小田原水産高のＩＦＦコードによく似た意味のない信号を発信しし始めたのだ。
当然、男子部の防空本部は蜂の巣を叩き落としたような大騒ぎになった。指揮系統の混乱から合計二ダースものＦ－１４、１５、１６が差し向けられた。パイロットからの報告で、本部はさらに混乱した。
「ガンポッドさえ装備していない。所属マークは笹と藤蔓に鶴。女子部の機体だが？」
「とりあえず男子部基地に下ろせ。確認する」
それが顧問の指示だったが、だれかが聞き間違えたのだろう。やにわにサイドワインダーを発射した。つられるように、次々と計約３～４ダースの各種ＡＡＭが注ぎこまれた。
坂井としてもここまでの大騒ぎになるとは思ってもみなかったので、早々と脚を出してはいた。だからまさかこんなことにはなると思わなかった。回避できなかった。勿論、射出される。爆風で、少し怪我を負った。
「摩周丸」が主港まで迎えに来て無罪放免とあいなったが、初雁は、またも無言だった。ただ不思議と、冷淡なものは感じられないのだった。

＊　　＊　　＊

影山 翔の行動には、その性質から見ても別の章を用意する必要があるだろう。

彼は今月に入ってから、ＭＦでＴ－４の後席を占めていた高２風紀委員を、校外の手下を使って人目につかないところへ連れだした。すぐにＴ－４からＦナンバーの機体（戦闘機）に乗り換えるためだった。２０人ばかりがあたりを固める中、影山は言った。
「Ｆ－１６くれよ」
風紀委員はしばらく考え込んでいた。
「よこすのか、よこさねーのか、どっちだ！」
殺気が高まる中、ようやく考えをまとめたらしい。彼はあまり乗り気でなさそうに、答えた。
「‥‥わかった。Ｆ－１６は出す。ただし５日は待ってほしい」
「５日だァ！」いよいよ影山の目付きが険しくなる。「遅え、今日からだ！それがダメなら‥‥」

彼がやにわに胸倉をつかみ上げた。小役人予備軍のような風紀委員は、必死に弁解を続けた。
「待ってくれ！」書類の書き替えと機体のやりくり、普通なら１０日はかかる。どう急いでも５日が限界なんだ！」
「知るか！」
猛烈な右が彼のみぞおちに入った。７割がた気を失いかけていた彼は続く急所蹴りで取り直してしまい、二重の苦しみを味わうことになった。
「‥‥わ、わかった！明日、明日だ！それでどうだ！」
「それ見ろ、できるじゃねーか」彼は手を離した。「じゃ、今から手続きといくか。‥‥それからいいか、他人に喋ったら命はないからな」

風紀委員は脱兎のようにあとも振り返らず、スッ飛んで逃げてしまった。

しかし無理はそう易々と通らないもので、このことは二日とおかず風紀委員長の武生の耳にも入ることになった。ただちに生徒会役員緊急会議が男女共同で開かれた。
「一旦彼らの言うなりにしておこう。いずれ彼らは大きな尻尾を出すから、そこを潰して即刻退学処分を学校に申請すればよい」
彼らの達した結論はこうである。これは生活指導教員の認可も得、関係係の教員すべての知るところとなった。問題は各員の演技能力だけだったが、こちらは杞憂に終った。誰しもおっかない連中に囲まれれば、そんなところで芝居を打つ余裕などなくなる。事実、大した間をおかずに呼び出された風紀委員長自らが、「その場」では本心から影山たちのグループに服従を誓ったのである。一般生徒にウラの事情はまったく伝わっていないから、この「事実」は全校レベルで重大なショックをもたらした。全寮制という閉鎖社会では逃げ場がないという特殊な事情もさらに事態を悪く暗く見せた。
そして内心一番慌てていたのは、仕掛けた張本人の生徒会だった。どうやら手持ちの駒だけでは勝ち目がなさそうなことがわかってきたのだ。とすれば頼るアテは一つ。
「宇垣さんに知らせよう。あの力は貴重だ」
宇垣麻美は今や女子部中学のみならず、真鶴全校の「裏側」の大部をシメる存在だった。清水次郎長のごとく、「マシなアウトロー」となっていたのである。風紀委員の穴を埋めるように陰ながら生徒の治安維持をやってきていたのだが、構成メンバーの層から言っても普段から生徒会各委員会からは疎まれる存在だった。こういう時だけ利用するとは虫がいいにも程があるだろう。そして、宇垣は正にそこを突いてきた。
「よしとくれ。オレらぁ提督（栗田榛名のこと）の下に入った時から、他人のケンカにゃ中立することにしてんだ。‥‥それに風紀に手を貸す義理もねーし、恩は売るだけソンだからな。知らねーから、勝手にやっとくんな」
「だけど」生徒会からの使者は食い下がる。「宇垣さんの縄張りを荒らしてるんですよ」
「それはそれだァね」宇垣は冷淡だった。「そろそろオレも総番の荷が重くなってきたし、いい潮時かもしんねーな」
「そんな‥‥！」
宇垣が傍観側に回ったというニュースは、動揺した生徒をさらに揺さぶることになる。

さて、影山の方もそうバカではないから、どうも生徒会の様子がおかしいことにはうすうす感付き始めている。そうでなければ１００人単位の族を統括することはできたものではない。Ｆ－１６でムチャクチャに暴れ回りつつも、何かしっくりこないものを感じる彼だった。そして、「影山旋風」はこれだけに止まらなかったのだ。それについては「その他」の項を参照されたい。

今回のＰＣ（１減１増）
高校　男子部　普通科
　　Ａ組　影山　翔
　　理数科
　　Ｈ組　沖田　悟　　菅原　絵馬
　　女子部　普通科
　　Ａ組　伊藤　早苗　　坂井　法子　　初雁　つばめ
中学　女子部　　Ａ組　井村　真知子

その他のリアクション
・影山翔
沖田・菅原の両名をも子分にしようとはかる。学祭期間中、ボクシング部の試合で勝譲二を使い裏トバクをやり、かなりのアガリを占める。模擬店のアガリにも手を出そうとしたが、こちらは父母会と地元商店街が扱っているので果たせなかった。「番格」を一人だけ呼び出して屈服させようとした計画も、使い走りに使われた勝譲二の要領が悪く、放課後すぐ海に出てしまう宇垣と接触できなかったため、名前とそこそこの意味のない情報を得ただけに終った。

・菅原絵馬
「カンバーランド」乗員ともども、小田原中央病院に入院。退院後、「花火事件」で協力した廉により、学内の便所掃除３日間。加えて無期寮内謹慎（半月弱で完了）。スタッフはそのままで巡洋艦「レイナード」（ベルナップ級）に配属。「伊達艦隊」旗艦「ドベⅦ」（キティホーク級　艦長　高２、松平洋和）防空直衛艦として伊達源三（高２）の監視下に置かれる。影山のグループに脅され、仕方なくその場は子分になるということでお茶を濁し、密かに反撃の機を伺う態勢に入った。

・沖田悟
無期寮内謹慎（一ヶ月強で完了）。「花火事件」後、化学部を除名される。ＭＡに転属。ＵＺＩ－ＳＭＧ装備、風紀委員会直率の通称「憲兵隊」に配置、同委員会の厳重なマーク下に置かれる。実験が挫折した後は、失意のままに海辺でウォークマンを聞きながら、ボーっと冥想にふける。（クラブは風紀委員会所属扱いになります）影山のグループに脅され、仕方なくその場は子分になるということでお茶を濁した。

・伊藤早苗
学園祭直後に編入。バレーボール部に入部。ＭＦ部ではＡ－７Ｅを割り当てられる。乗組空母は「エテルナ」（フォレスタル級　艦長　高３、鈴木真琴）。

・坂井法子
自ら「摩周丸」艦載機によるアクロバット展示を提案、ソロをとる。日頃の行動がＭＦ主将の栗田はるな（高２）の目に止まり、１０月初頭にＦ１１Ｆ－１タイガーの班へ移された。乗組空母は「ＣＶＡ－１２」（エセックス級　艦長　高１－内部生、本庄桂子）。

・初雁つばめ
乗艦「ＣＶＥ－２」を「摩周丸」と命名。文化祭時には男子部－女子部の主港間を結ぶ定期連絡船仕業を務めると同時に、ハリアーの海面高度アクロバット飛行展示を行って人気を呼んだ。

・井村真知子
乗艦「ＡＯＥ－３」を「ブルーミントン」と命名。文化祭前にマダラ迷彩を施し、きれいに掃除する。これによって今年の文化祭の「Ship of the year　中学女子部賞」を受けた。ポスターの件は断わった。

知ってて得する（かどうかは「？」）真鶴豆知識
・ＤＭシステムの砲の強度…原作者によると、ノーマルの状態では従来型火薬の爆発には耐えられません。これを耐えられるよう改造するのは、銃砲刀剣類所持等取締法にひっかかるため、まず出来ません。発射薬の量を減らしても、よほどうまくやらないと、今回のようになるそうです。
・風紀委員…ホントに怖い。ゲシュタポ並みに怖い。寮・校内生活の安定のためなら殺し以外の大抵のことはする。学校側に問題生徒の退学を申請できる権限も持つ。ただ、やり方が多少強引すぎるところもあるので、一部の生徒の反感も買っているとか。
・学校の規模…まず、一クラスは４０人前後で構成されています。（水産・農業は２０人）これが高校はＡ～Ｈと水産・農業の１０組、中学はＡ～Ｄの４組になっているので、男女合計で３２００人弱になります。
・持ち込み機体のこと…違う機体を割り当てられても、別に自分の機体に絶対乗っていけないわけではありません。ちょっとぐらいならいいそうです。
・このゲームの中での日付…巻末の次号発行予定日を見て下さい。その月が、今度やる月の目安です。年代は西暦２０００年をちょっと過ぎたあたりです。
※アクションは、目次の方に締め切りをだします。なるべく遅れないで下さいね。処理と原稿作りの都合もあるから。

校長から
さあ。出ーたーぞー、ついに対異性－５が‥‥で、それはそうと発行後、重大なミスに気付きました。「調査書」はやはり毎回送ってください。イラストは面倒でしょうから不要ですが、「運」やなんかの変動数値の扱いのことがあったのです。今回は可能な限り連

絡をとって後送してもらいましたが、明らかに原稿締め切りに間にあわない人の分は前回のものをそのまま使いました。スンマセン。

あと、部活について。兼部はできませんので、二つ以上選んだ人は（模型部三軍の分は除く）すぐ１つに絞ってください。

さて、今回はどうやら「主役」が複数形になってきたようです。アクションてのは「書いたもの勝ち」ですからね、皆さんもどんどん書いたってください。確かに「これはちょっと‥‥」と首をひねるような行動も多々ありますが、致命的な流血ざたになるのが避けえない行動以外はまず採用されます。大事にならないようこちらでないチエ絞りますので。‥‥ただし、沖田君。君は「退学」にリーチがかかっている状態です。充分気をつけてね。

‥‥やあ。ページを増やせという意見もありますね。こっちの方は私がなれてきて、しかもキャラの方で話をふくらませられるアクションをかけてくれるようになれば、１２Ｐぐらいは可能でしょう。現に今回も全体数では原作の連載量を上回りましたよね。（苦笑）

次回キャラに関係する主なイベントは順に達磨忌、中間試験、高１の永平寺参拝、中１の富士山観光です。達磨忌というのは、つまりダルマさんの命日ですね。これは体育館に全生徒（男女は別）集まって般若真経を読むだけです。

中１富士山は五合目までバスで上がりすぐ下りる、小学校の遠足の延長です。そんだけ。

高１永平寺（男女同時）は一泊をお山で過ごす、結構ハードな参禅会です。三泊四日の残り二日は能登の国民休暇村を拠点に、金沢観光を行ないます。‥‥まあ、これって私の母校のコースとおんなじなんですが。経験から言わせてもらうと、二日目の昼飯は兼六園横の食堂で団体でとるのですが、これが普通の定食なのに「ひかり輝いて」見える、そんな生活を約１６時間送るのです。多分キャラたちも、先輩からあることないことふっかけられて、さんざ冷やかされているはずです。‥‥そうそう、永平寺は次のとおり、日程が級によってずれます。細かなコースは別紙参照ということで。

ＡＤＥ：先発　ＢＣＦ：次発　ＧＨ水農：次々発

ＤＦＧが内部生のクラス。Ｅはスポーツ特待生のクラスです。ＧＨは理数科。Ｆは内部生の私文受験クラスです。Ｅ組の連中だけ一段ガラが悪い、ということは想像できますね。

‥‥ネットワールドに広告が載ったはいいけれど、これの参加者は増えそうにないし、ということで各スタッフに水増しＰＣを作ってもらおうかと思ってます。こちらで指定する先に各員１名ずつ。今井村さんだけでしょー、これってかなり悲しいことだと思うんですよ。何か意見ある人は、今回参加時に言ってつかーさい。

キャラシート記入に関する注意

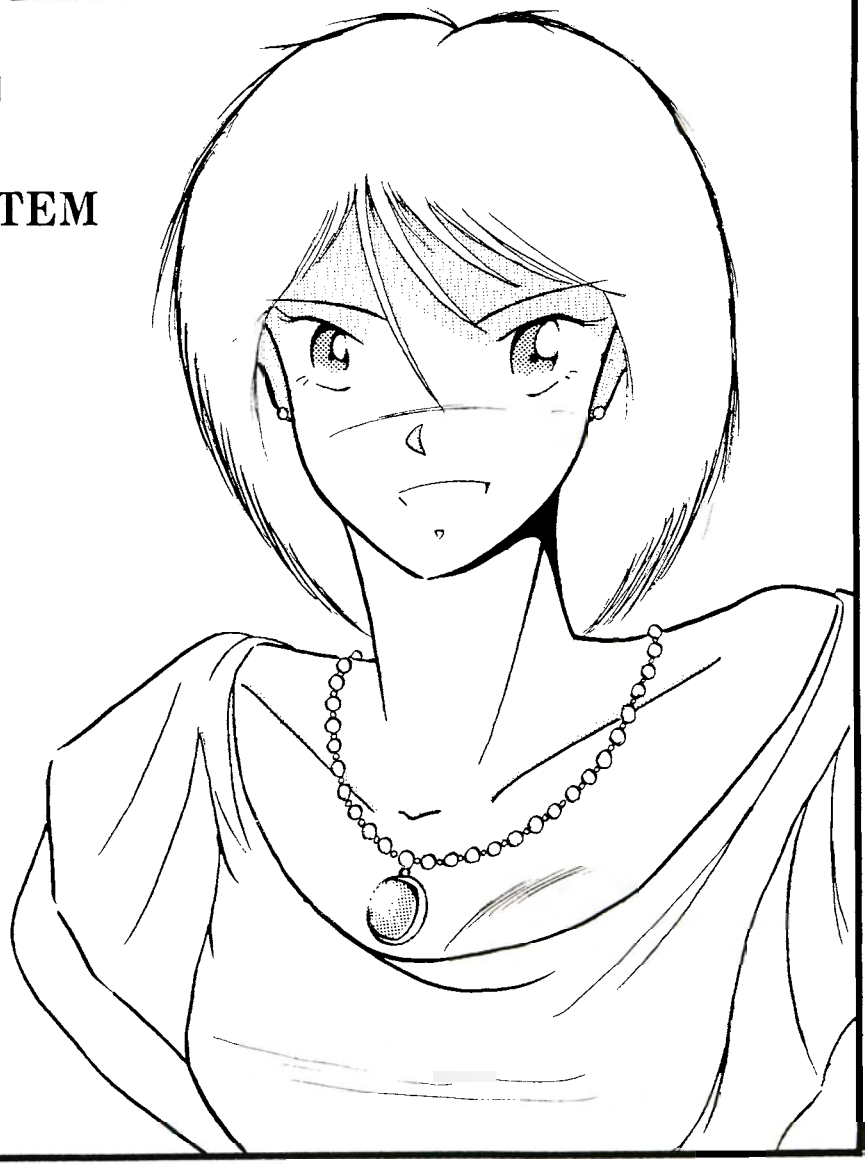
なにしろ私はものぐさなので、実際使ってみるまで記入漏れとかのチェックはやらないものですから、今回対異性チェックで初めて全キャラの能力値欄を見たのでした。で、おかしいとこをここで指摘します。わからないとこは電話で菊地に聞いて下さい。新しく参加する予定の人もここ読んで、参考にしてね。

・沖田悟…能力値の合計がぜんぜん違いますよ。体力能力値も空欄のままですね。
・伊藤早苗…体力の能力値が無記入ですね。これ「基準値」だけ空けとくんですよ。
・坂井法子…「異性への関心」欄が無記入のままです。「部活動・生徒会」欄も書いてね。

あと皆さん、「部活」欄には模型部で乗ってるものもちゃんと書いといてくださいね。

LOOK OUT!

PRESENTED
BY
EX－SYSTEM



＜経過報告＞
惑星ティラノスにおいて発生した「Ｕ＆Ｋカンパニー支部長誘拐事件」は、会社側と犯人側の交渉ラインが断たれてしまったことにより解決が困難な状況に陥ってしまった。事件解決のためにティラノスへとのりこんだＤ．Ｓ．Ｓ．であったが・・・・・・・

４，手懸かりを求めて
（REPORTER：ショウ）

「ここが支部長はんが襲われたとこか」
俺とジュンはエドモンドはんに案内してもろて、支部長の車が襲われたゆう現場へ来た。ユウとエミはお嬢はんのガード。なんせユウはお嬢はんのお気に入りやさかいに、ガードするにはもってこいっちゅうわけや。
「どうですか、何かわかりそうですか？」
「どないやろなぁ・・・・・・」
実際のところ、案内してもろたのはええけど、手懸かりが見つかるかどうかはなんとも言えんかった。
なんせ事件が起こってから一週間もたっとるんやから、足跡なんぞは勿論のこと、路面に残っとったはずのタイヤ痕まで薄うなっとる。それに相手がプロやったとすれば、証拠なんぞとっくの昔に処分され取るやろう。
「どないや？なんかあったか？」
「駄目。なーんにもないみたい」
さっきから岡の周りをうろついとったジュンが肩をすくめて答える。
しゃあないなぁ、「困った時の「ゼーダ」頼み」といこか。
「しゃあない。「ゼーダ」にスキャンさせてみぃや」
「わかった」
そう答えると、シュンは傍らのアーモ・バイク「ゼーダ」に駆け寄った。
「聞いての通り。よろしくね」
「わかりました」
「ゼーダ」の頭脳、「ゼーダ・システム」が答え、スキャンを始めた。「ゼーダ」につまれてあるセンサーは、半径１５０ｍの範囲内に落ちとる針を探すこともできる優れもんで、俺らにとっては非常にありがたい物なんである。
それを扱う「ゼーダ・システム」は、非ノイマン式の自己学習・自己思考・自己判断などを全て行ない音声による入出力を行なう超高性能のＡ．Ｉ．で、こいつには色々と世話になっとる。
「私を基準として、４時３０分の方角、３０ｍの地点に不審な物体をキャッチしました」
早速何か見つけたらしい。ジュンが走って行った。
「ねえ、何だろ、これ」
ジュンの拾って来たもんは、なんちゅうか、ちょうど弾丸を縦に４つに割ったみたいなもんやった。長さは９ｍｍパラより少し長いくらい。幅は、ちょうど４．５ｍｍくらいか。４つあわせたら９ｍｍ径の弾になりそうな感じや。
「他にはなんか落ちとらんか？」
「何も見当たりません。おそらくは、犯人グループが回収して行ったものと思われます」
これだけが偶然のこっとったゆうことか？
抜け目ないやっちゃな。やっぱり、プロの仕業かいな？
「ほな、こいつ解析してくれや。一体、何なんや、これは」
「わかりました。しばらく御待ち下さい」

そう言うて、「ゼーダ」が解析を始めた。こんなことも、こいつには朝飯前のことや。
「完了です。ディスプレイを見て下さい」
「ゼーダ」のメーター・ディスプレイに、例のもんが表示された。
「この物体ですが、形状から判断して、このように・・・・・・・・」
ディスプレイに同型のパーツが３つ表示され、組み合わされた。
「４つを組み合わせて使用されていたと思われます」
それを見た俺の頭ん中に、あるもんが浮かんだ。
確か、昔あんな感じの対戦車用実弾兵器を使うた様な気がするんやけど・・・・・・
「ＡＰＤＳ弾か！」
「その通りです」
俺の思った通りやった。
「ＡＰＤＳ（ＡＲＭＯＲ－ＰＩＥＲＣＩＮＧ　ＤＩＳＣＡＲＤ　ＳＡＢＯＴ）弾」。２０世紀に戦車砲弾の一種として開発されたもんで、貫通力を増すために「サボット」ゆうスリーブで小口径の重金属弾頭を射ち出す砲弾のことや。
砲身を出た時点で「サボット」は抜け落ち、弾頭は大きい運動エネルギーを一点に集中する形で装甲を貫通するようになっとる。この原理を使えば拳銃弾サイズでも防弾ボディぐらい簡単に打ち抜けるような弾が作れる訳や。実際、俺が昔使っとった対戦車ライフルの弾丸はこのＡＰＤＳ弾の縮小版やった。
「ただし・・・・・・」
「なんや？」
「このタイプ、つまり９ｍｍパラベラム弾とほぼ同サイズのＡＰＤＳ弾などというものは何処の軍の制式リストにも、メーカーのカタログにもありません。加工状態と材質などから考えて、おそらくはハンドメイドかそれに準ずる方法で、この星において、それも対人テロ専用に開発・生産されたものと思われます」

５，一方、その頃・・・・・・・・
(REPORTER：ユウ)

まったくもって、たまったもんじゃない。
ショウとジュンが現場へ情報収集に行ってる間は、俺とエミの二人でこちらのお嬢さんの面倒を見なきゃならないわけなんだけど・・・・・・
「おねえさま♡、お茶にしません？」
・・・・・・・・これだもんなぁ・・・・・・・・
最初に誤解をといておこうとしたのに、ショウのやつが、「言わん方がええ。その方がガードすんのも楽と違うか？今やったら俺が離れとくだけでええけど、お前が男やてゆうたら、エミとジュンだけでガードせなあかんはめになるんやぞ」なんて言うから・・・・・・
あの野郎、半分楽しんでるに違いないんだ。いつもそうなんだから。人がこういう苦労してるのを横で見ながら楽しんでんだ。絶対そうに決まってんだ。
「おねえさま、どうなさったの？怖い顔して」
「え？い、いや、なんでもないの。ちょっと考え事してただけ」
こうなったら、もうヤケよ。この仕事の間だけ、女役に徹してやろうじゃないの。

この仕事の間だけだぞ！

・・・・・・俺って一応リーダーなんだけどなぁ・・・・・・・・

６，事態進展
（REPORTER：ジュン）

あたしとショウは、ティラノスの首都でありＵ＆Ｋ支部のあるオークランド・シティに来た。襲撃場所で拾ったサボットを手懸かりに捜査を始めるわけ。
「で、どっからあたるわけ？」
「きまっとるやろ。パターン通りや」
そういってショウはサングラスをかけた。
ショウってサングラスかけると大昔の映画に出てた何とかって言う暗殺用アンドロイドみたいな顔になる。
パターン通りってことは、ダウンタウンもしくはスラムあたりから始めるってこと。そういった場所はショウのお得意先だから、心なしかショウの表情もゆるんでみえる。
「ねえ、ショウってさぁダウンタウンとかスラムとかへ行く時になると楽しそうな顔するね」
するとショウはこっちを見てからニッと笑った。
「わかるか？」
「もち。どれだけ一緒にいると思ってんの」
「それもそやな……居心地がええんや、ああゆうところは。俺の性に合っとるんやろな。ああゆうところにおると、昔に戻ったような気がするんや」
ふぅん。
そういえば、ショウの昔のことって聞いた事無かったなぁ。あたしもあんまり話さなかったけど。
昔軍隊にいたって噂は聞いたことあるけど……

そうこうするうちに、あたしたちはそれらしき通りに足を踏み入れた。特有の空気がたちこめ、そこいらにガラの悪そうなにーちゃんや娼婦（たちんぼ）のねーちゃんがたむろってる。フツーの人間なら一度迷い込んだら、ただじゃ出られないようなとこだ。
ショウはというと、無表情ではあるものの、サングラスの奥の目は楽しそうに輝いているのがわかる。どーしょーもない奴だわ。
二人がゆっくり歩き出すと、周りの空気が動き出すのが感じ取れた。姿は見えないが、通りの影からこっちを見てる奴等がいる。それほど多くではないが、感じからすると常習犯だろう。こういうところにはよく居るんだ。
隙あらば襲いかかって来ようって魂胆なんだろうけど、そうはいかない。こう見えたって、こっちは数々の修羅場をくぐり抜けて来たＤ．Ｓ．Ｓ．のエージェントなんだから。素人風情に隙なんか見せてたまるもんですか。
「一人くるで」
ショウが小声で教えてくれた。まもなく、影から一人の男がふらりと出て来た。
いかにもそれ風と言った恰好で、酒でも飲んでいるかのように装ってはいるが、明らかにしらふだ。常習犯とはいえ、レベルの低い奴みたい。
そいつは、いかにも酔っているようなふらふらとした足どりでこっちへ歩いて来ると、ショウの腕にぶつかった。なんとも古典的なやり方だわ。いまだにこんな方法を使う奴がいるのね。
「おい、てめえ」
男がショウの方を睨み付けた。何度も言うようだけど、すっごい古典的な手段。よくこれで今まで通用して来たもんね。素人相手なら通用するかもしれないけど……
「人にぶつかっておいて、挨拶もなしかよ？」
ショウはぜーんぜん動じない。それどころか、逆にそいつの方を睨み返した。
「な、なんだよてめえ、やる気かよ」
男の方が思わぬ展開に驚いてるみたい。声が少し上ずってる。
「ちょうどええわ……」

そういうと、ショウは男のえり首を掴み、持ち上げた。男の足が地面から数十ｃｍ持ち上がる。
「聞きたいことがあんねけど・・・・・・ええか？」
まるで地獄の底からわいて来る様な声でショウが言った。男の方は完全に縮みあがっている。
「は、はいっ。なんでも答えさせて頂きますっ」
すごい変わりよう。まあ、大体こんな連中ってのは、相手が自分より強いって判断したら、とたんに弱くなるもんだから。
しばらく間をおいて、ショウは男に言った。
「ほな聞きたいんやけどな、ここらに腕のええガンスミスはおらんか？」

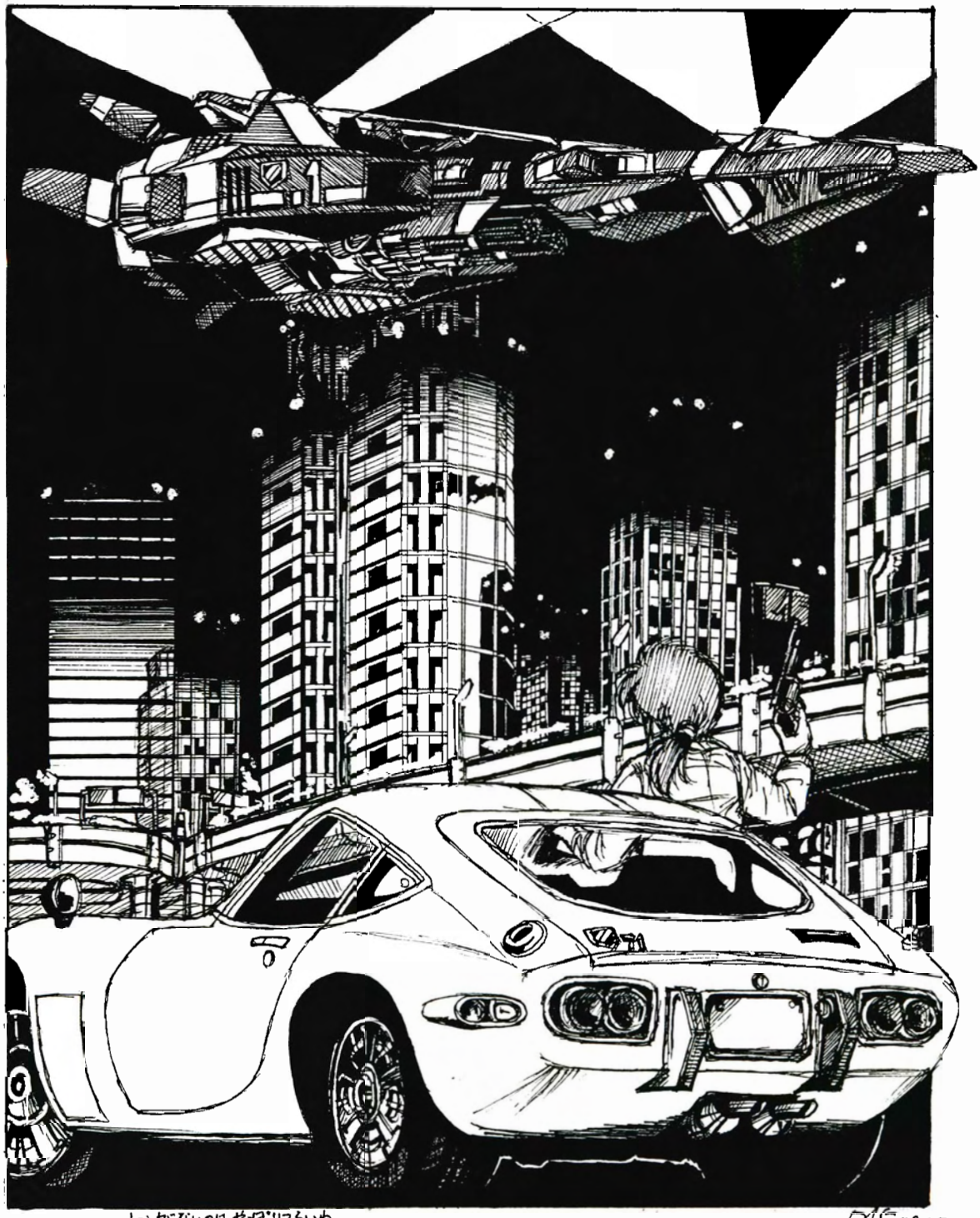
「ここかい？ほんまやろな」
「はいっ。ほ、ほんとうですっ」
「そおか。ほな、行ってええぞ」
ショウがそういうと、音はおおあわてで逃げて行った。
男の案内で来たところは、どちらかというとメインストリートに近い通りの銃砲店だった。なんか変。
「ほんとにこんなとこなの？」
「さあな。入ってみるしかないやろ」
そういってショウは店へ入って行った。仕方ないから、あたしも続く。
店内はごく普通のガン・ショップだった。これと言って不審な点は見当たらない。
ほんとにここなの？
「いらっしゃいませ。何か御探しで？」
カウンター越しに男が話しかけて来た。たぶん、この店の店主だろう。歳は３０代前半くらい、ルックスノーマル、中肉中背、とこれと言って特徴のない男だ。
「弾、作ってもらえんやろか？」
男の顔色が一瞬変わった。怪しい。
「リロード弾でしょうか？それとも銀の弾丸（シルバー・ブリット）でも？」
「そおやないんや。こうゆうもんなんやけど・・・・・・」
そういってショウは例のサボットを取り出し、カウンターに置いた。男の顔色が完全に変わった。
「あんた、どこでこれを？」
男の目には、強い疑いと恐れの色が浮かんでいた。明らかに、何かに怯えている。
「何処ででもええやろ。俺が聞きたいんは、こいつを作ってくれるんかどうかゆうことや。どうなんや？」
男は黙ったまま、下を向いてた。顔色が悪いし、汗もかいている。
「こ、答えは・・・・・・・」
男が動いた。
「ＮＯだ!!」
男は後ろの壁に飾ってあった拳銃を取り、発砲した。あたしとショウは動きを読んでいたから、その前に飛び退いていた。あたしは飛び退きながら、ウエストのホルスターからコルト・デルタエリートを抜き、撃った。男の手から拳銃が弾き飛ばされる。
「た、たのむ！もう少し待ってくれ！生産が追い付かないんだ。あと一週間もすれば要求どうりの数が出来上る。それまでは・・・・たのむ！娘の命だけは！」
一体どういうこと？
「どういうことなんや？事情を聞かせてくれんやろか」
「あんた達は奴等の仲間じゃないのか？」

「そうだったの……娘さんが……」
男———アレックス＝ジョーンズの話しはこうだった。
数ヶ月前、彼は大型動物の狩猟用にＡＰＤＳ弾が応用できないかと考え、９mmサイズのＡＰＤＳ弾を作ってみたらしい。これを何処からか嗅ぎ付けて来たある男が、この弾を大量に発注した。アレックスは最初は何も疑わなかったのだが、そのうち様子がおかしいことに気付いた。が、気付いた時には既に遅く、連中は彼の一人娘を人質に取り、弾丸の生産を急がせたのだった。
「この弾丸は生産工程が複雑で、現在の状態では量産は難しいのです。かといって、このままでは娘の命が……」
可哀相……
「許せやんな……」
ショウがぼそっと言った。サングラスの奥の瞳には、怒りの色があった。
そういえば、常々ショウは「女子供を人質にするようなやつは、人間のクズや」って言ってた。
「心配せんでええ。娘さんは、俺らが助け出したる」
アレックスは、はっと顔をあげた。
「あ、あなた方は一体……？」
ショウは軽く笑みを浮かべると、こう言った。
「正義の味方……や」

＜第二話　完＞

Peace Presser Maya™

STORY 本居ニじ / ILLUSTRATION EPST DARIUS-5



トーンがないのはやっぱりつらいね

-DAS 1991-

（前回までの粗筋）
尼崎摩耶とヤーニャ・モロフォビッチは、ＩＣＰＯの捜査官である。特務捜査課に所属する彼女たちは、太陽系外までにその領域を拡大した人類の間に生じるトラブルを解決するという職務に就いていた。
西暦２１２Ｘ年、ＩＣＰＯ日本支局のコンピューター回線が、ウィルスによって破壊された。直接の被害を被った摩耶たちは、今、反撃に立ち上がる。

４：「くは――――っ・・・・・・！」
摩耶は周囲の惨状にただ絶句するばかりだった。端末を扱っていた者は大なり小なりの傷を負っている。いずれも致命傷でないのは幸いだが、その量は他を圧することはなはだしい。
ヤーニャはその中でも深手の方に属していた。もともと運動神経は鈍い方である。いた仕方なかった。特捜課内はほぼマヒ状態で、原因調査どころではないだろう。・・・・ふと摩耶の視線に止まったものがあった。ヤーニャの私用スーパー・コンピューター、「スプートニク」である。それは、室内でほとんど唯一の、無傷のままのコンピューターだった。
「起きな、スプートニク！」
彼女が鋭く命じると、低いハウリング音とともに回路が立ち上がり、本体部の小さなパイロットランプのＬＥＤが緑に点った。続いて音声センサー、モニター、プリンター、ソフト読み込み装置などのパイロットランプが次々に点っていく。合成音声がごく自然な調子でしゃべりだす。よどみない標準日本語だ。
「Ｐｉ！声紋チェック、尼崎摩耶様と確認、日本語モードをオープン。おはようございます、摩耶様。将棋になさいますか、それとも２０世紀の戦略ゲームになさいますか？」
「主よ、見えざることはよきことかな」摩耶は呟いた。彼女は「基本的」に仏教信者なのだが、ヤーニャがシニカリストであることを逆に皮肉って、わざとキリスト信者風にやってやったのである。「対侵入防御システムを開いて、監視カメラの回路に侵入してみたら？」
「冗談ですよ。ひどくやられてますが、いかがなさいました？」
スプートニクは限りなく人間に近い会話能力さえ備えている。冗談を飛ばす事さえ可能だった。そしてあらゆるネットワークに侵入する能力さえ、備えているのである。
「見ての通りよ」摩耶は後れ毛を乱暴に掻き上げた。「ほとんど同時に吹っ飛んだわ。原因を調査して」
確認の電子音が短く鳴って、回路のハムと強制冷却ファンの作動音が高まった。スーパー・コンピューターが、フル回転で事故の原因を探りだしたのだ。しばらくすることのなくなった彼女は自分の席に腰掛け、扇子をもてあそびながら、たった今医務室にかつがれて空席となったヤーニャのデスクを、見るともなくみつめていた。血が、点々とこびりついている。
「・・・・原因と見られるウィルスの残片を発見しました。・・・・今までに見たことのないタイプです。消えていく・・・・自己破壊能力を持っている模様・・・・」
摩耶はアドレナリンの分泌を実感した。音をたてて唾がのどを下る。
「量は？」
「・・・・わかりません、バラバラになっていて・・・・自己増殖と自己破壊を交互に繰り返すタイプのようです。各端末に最低一ユニットはいると見てよいかと・・・・ＣＰＵはもう使い物になりません。修理しようとしても、またすぐに再発します。機材そのものを、丸ごと入れ替える必要があります」
「下手人・・・・プログラマーは、誰」
「確定不可能です。情報が余りに不足しています。・・・・なにしろ初めて見るタイプです。普通はプログラマーのクセが、どんなものにも見られますので。・・・・従って、初犯だろうということは確実ですが・・・・」
スプートニクは、そこで一端黙った。
「・・・・探査中止！回路閉鎖！主電源を切って下さい、摩耶様！本体が無事なうちに！」
意識の底の警報が、とっさにスプートニクの電源コンセントを引き抜かせ

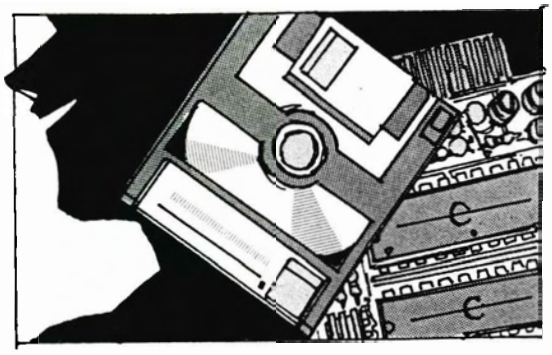
た。過去にも何らかの外部侵入によってスプートニクが破壊されかかったことは一再ではない。大概は防御システムまたは迎撃プログラムによって阻止されるが、それで効果がない場合には最も効果的な方法‥‥回路を一時的に殺す‥‥しか、ない。セーブしていないプログラムはたちどころに消滅してしまうが、本体が受ける損害を思えば、わずかな犠牲である。今し方の短い沈黙は、迎撃システムが作動し、その効果を観察するためのものだったのだ。

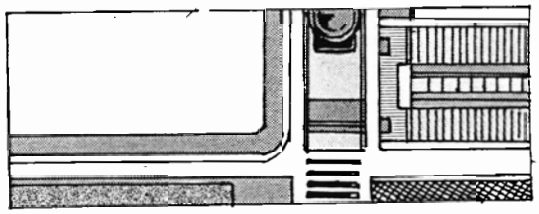
充分に待って、摩耶は再びコードをつないだ。

「おはようございます、摩耶様。将棋になさいますか、それとも‥‥」

摩耶はかぶりを振った。冗談と思いたいが、そうではない。ネットワーク回線の光ファイバー・コードを抜き、彼女は自分の回転椅子にもたれた。

スプートニクを使って犯人を突き止めるという目論見は、あっけなく挫折してしまった。何度繰り返したところでこれ以上の結果が得られる確率は極





めて少ないし、最悪の場合にはスプートニクそのものが暴走して手がつけられなくなることもありえる。初犯らしいということがわかっただけでも、収穫とするべきだろう。ただし、それだけに始末におえない。前科者よりも、そうでないものの数の方が遥かに多いのだから。

何よりも困るのは、端末機が使えないことである。

２１世紀初頭まで大概の警察組織は、コンピューターなしでも何とかやっていくことができた。しかしながら２２世紀の今となってしまっては、とてもではないがそうはいかない。ここまで破壊されてしまっては、お手上げもいいところだ。

一体、どうすればいいのか‥‥？

頭脳労働の苦手な摩耶は、途方に暮れるばかりだった。これから先、しばらくの間は通常ヤーニャの領域なのだ。

ヤーニャは医務室横のベンチに腰掛け、気付けに渡されたブランデーをなめていた。小さい白の紙コップを両手

でまわしながら、何でウォッカが出ないのか、などと考える彼女だった。あの豊かな味わいに比べたら、ブランデーなどとても飲める代物ではない。こんなものなら、よほど消毒用エチルアルコールの方がマシである。大体、気付けにはブランデーと決めてかかっているのが許せない。

しかし、まあ、一応のアルコールだから。理性を総動員して感情を説き伏せる彼女だった。

おろしたてのシャツが、血で駄目になってしまった。ハンガリー製の安物ではあるが、勿体ないことに違いはない。‥‥そうだ、早めに水で流しておいて、後で漂白すれば‥‥否、駄目だ。量が多いし、それに時間は充分経ってしまった。漂白したところで黄ばんだシミは残る。‥‥それなら生き残りでハンカチを作ろう。綿だし、ずっと有効に使える。

ヤーニャは思わず苦笑した。

もはや一枚のハンカチに困るような生活をしている訳でもないのに、子供時代のシベリア暮らしのクセは抜ける気配がない。仕事帰りに青山のクラブによる一方で、東急東横店のバーゲンセールを見逃さない一面も持ち合わせているのだった。

紙コップの茶色い液体に目を落とす。ウォッカが欲しい。マヤは持ってきてくれまい。ちょっとやそっとの傷には動じず、いつも扇子で扇ぎながら泰然としている、がさつな娘。男も持て余すような拳銃を持ち歩き、力押しですべてを片付けようとする無茶な奴。

不意にスプートニクに思いが移った。マヤが、あのがさつな娘が、デリケートなスプートニクに無茶をさせているやもしれない！彼女はすっくと立ち上がった。

体がふらつく。いまいましいブランデー、ウォッカならいくら飲んでもこんなだらしない酔い方にはならない。あるとき突然酔いつぶれるだけだ。ああ、頭が回るようだ。

さっきの事故のせいでエレベーターも止まっている。階段ホールに転がりこみ、5階までほとんど這って上がる。事情をまだよく飲み込んでいないのか、上から降りてくる者が血まみれになったよれよれのシャツに目をしかめるが、気にならない。着くなり、ダッシュともつかない屁っぴり腰で、特捜課の部屋まで駆け込んだ。警視庁から出張って来た者たちが現場検証を開始した外で、摩耶は腕組みして突っ立ち、室内を眺めている。

「マヤ！」ヤーニャは一度立ち止まり、それからつかつかと歩み寄った。「スプートニクは！」

「ああ、ヤーニャ」彼女も気付いた。

「大丈夫？」

「そんなことより、スプートニクは無事なの？」

「‥‥多分ね」

「多分!?どういうことよ！」

「‥‥例のディスクは入れてないから。ただ、メカは少しの間借りたけど」

「何に使ったの！」

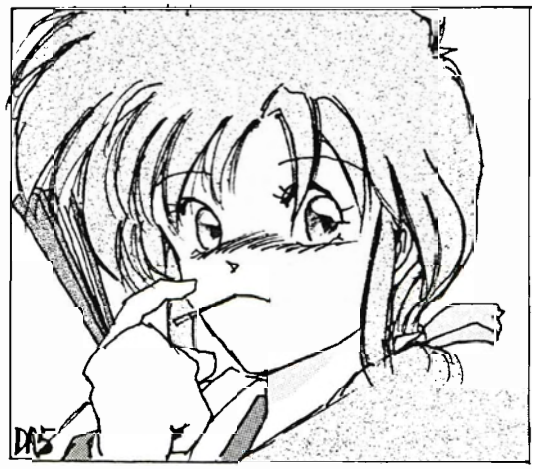
「回線のチェック。ウィルスの残片が見つかったわ。けど‥‥」

「けど、何！」

ヤーニャは気も狂わんばかりに、摩耶の両腕をつかんで問い詰める。電子工作を得意とする彼女が精根込めて作り上げ、否、生みだした、彼女そのものの最高結晶である。無理からぬことでもあった。

「侵入されかけて、コード抜いた。だから‥‥セーブはしてない」

ヤーニャはそれを聞くなり、卒倒してしまった。（続）



Ｓｐｉｒｉｔ ｏｆ Ｂｅｌｔ―――特　ロ　魂―――
宇垣：今回提督はショックから立ち直れないんだって。
岬：ＰＰＭの表紙だろ？あれはオレも腰抜かしちまったよ。
菊地：わた、わた、わた、ってな。
香津美：「すごい」しか言えなかったもんね。
菊：封開くだろ。中身出すだろ。まず出たのが「くぁー‥‥っ」でな。腰が抜けそうになって、ビルの爆破解体シーンがイメージされるだろ。んでもって次の瞬間、「超絶ーっ‥‥あきゃきゃきゃきゃ‥‥‥」だもんな。
宇：スピナーといい、ビル街といい‥‥
香：あとは話の内容よねえ‥‥
菊：それを言うな、それを。ショック受けてんだから。それにこの２０００ＧＴ！ノントーンでここまでやる！井村氏のメッサー見て以来のショックだでよ。
岬：２０００はお前さんの認める数少ないスポーツカーだしな。
菊：おーよ。あとはパンテーラとヨタハチ、スカＧだな。
香：ねえ、ポルシェは？
菊：ありゃ成金が乗るの。ダーメ、日本の道じゃ性能過剰すぎて。
香：じゃＢＭは？
岬：スターリンのオルガン（註１）か？
香：ち、が、う、わ、よっ！
菊：ベンベーだろ？あれぁ‥‥おめ、アーパー姉ちゃんが乗るやつだ。結構乗る人間選ぶくせに安いから、イメージダウンが激しくて。確かにいい車なんだけど、ダメ。５０越えた太めのオッサンがドライビンググラスかけて乗るとサマになるけどね。ベンツも。
宇：で その論法でいくとアメ車はみんな大っきすぎ、ロイスはイギリス人専用。なーんも残んないじゃない。
菊：いいんだよ、それで。どうせ日本は狭めーんだから、汽車乗りゃいいの。車なんかよか遥かに安全正確に、どこだって行けらあ。営業鉄道のレベルは世界一だでよ。
香：じゃ線路ないとこは。
菊：サニーだサニー！サニーに乗んの！適当なサイズと燃費、んでもって充分なパワー。狭い国土じゃ使い勝手がいいし、文句あるか。
宇・香：あるわよ！
宇：その理由ならかぶと虫兄弟（註２）はどうなのよ。
菊：♨‥‥痛えとこ突いてきやがったな。
香：ねえねえ、セドリックも否定すんの？ごひいきなのに？
菊：♨♨‥‥この小悪魔がァ！
岬：シャルマンは？
永平寺：‥‥なあ。コスモ・スポーツ（註３）はどうなったんだ。
菊：だ―― ！ テロかよ。おまーらオレをそこまで迫害して楽しいか？
宇・岬・香：せーの、もちろん！
永：当たり前だ。どの世にもトップのものには冷たい風が当たるものと相場が決まっとる。
菊：あーあ、空技解散すっかなあ。
宇：よしてよ！オモチャがなくなっちゃうでしょ。
菊：はァ‥‥（嘆息）

註１：ＢＭ－２１。ソ連の長射程多連装ロケット砲。トラックなので防御力は皆無に等しいが、こいつの間接射撃をくらうと地獄に鬼を見る思いである。
註２：フォルクスワーゲン ビートルとスバル３６０。
註３：初代の方。知ってる人はそういるまい。

後　記

菊：今回どうしたイラスト陣。作画レベルがブッ飛び過ぎですぜ。
宇：さあ、涼しい季節です。風邪には気をつけて下さいね♡
岬：何か面白いマンガ知ってる人、教えてたもれ。ちょーっと情報が‥‥
長：こないだ初めて通天閣へ行った。
香：読者に会長と同姓同名の方がいるらしいです。ホントですか？‥‥お気の毒に。（♨）
永：坊主で悪いか！
た：私も就職活動をしなければならない時期になりました。ヤダなぁ…
晃：先日、タカさんと二人でＰＣのカダッシュをクリアー。次はメガドラの飛龍だ！
孝：愛車のＴＺＲ様も、もう２００００㎞になる。古いバイクはいろいろ金がかかって、くるピーの。
Ｅ：単位が足りない。トーンも足りない。金も足りない。誰か助けて下さい。

Ｓtaff
編集長：菊地研一郎／編集委員：宇垣麻美
永平寺九頭龍　香津美どぶろく
筆者：長船吉光　本居こじ　晃孝秀一
Ａ．Ｆ．フイネクスレイ　岬当麻
絵：ただのりな　孝行始　EPST-DARIUS 5
（脱稿順）

Ｂlowers　第３号
第２巻第３号（通巻４号）
平成３年１０月１日発行　　代価３００円
（送料別）

編集人・発行人　菊地研一郎
発行所・印刷所　「空技廠」

※本誌記事の一部または全ての無断使用を禁じます。

今月の表紙
マクダネル　Ｆ３Ｈ－２　デモン　画・孝行 始

今月の裏表紙
ＰＰＭ用挿絵から
画：ＥＰＳＴ－ＤＡＲＩＵＳ　５

次号は１０月末までに発行したいと思いますが、
多分無理でしょう。